

I 研究主題

伝え合う喜びを感じるための援助のあり方を探る

II 主題設定の理由

平成29年3月に改訂された幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の実現が重要視されている。「遊び」が「学び」である幼児教育においては、友だちと伝え合いながら遊びを深めていくことが大切であり、その後の小学校教育とのつながりを意識した長期的な見通しをもった援助を積み重ねていく必要があると考える。

近年、幼児を取り巻く環境は急激に変化しており、核家族化や少子化、都市化、テレビやゲーム・スマートフォン等の発展等を要因とした、コミュニケーション能力の低下や遊びの経験不足・内容の変化等、子どもの育ちにも変化が見られるようになってきている。津留地区においても、住宅団地の多い地域ではあるが核家族や転勤族が多く、保護者同士や地域のつながりが希薄であり、交通量が多く遊ぶ場所も少ないことから、屋外よりも家庭内で遊んで過ごす子どもが多いという実態がある。

本園の子どもの姿を見てみると、入園当初から教師に親しみをもって関わろうとする子どもが多く、自分が経験したことや気づいたことを話したり、遊びに誘ったりする姿がよく見受けられた。しかし、積極的に話すものの、相手の話を聞かずに一方的に話を続けることが多く、言葉でうまく伝えられない時はもどかしさから怒鳴ったり手足が出たりする等、困りを感じている姿が見られた。また、遊びにおいても、教師には積極的に関わろうとするが、友だちに対しては興味があっても関わり方がわからず、戸惑ったり傍観したりする様子が見られた。前述した姿は入園当初にはありがちな姿であるが、保育の課題として捉えることとした。

そこで、年間を通し、個や期ごとの育ちに応じて、コミュニケーション力を育む援助を積み重ねていきたいと考えた。また、子どもが遊びを深めていく過程で、互いの思いを伝え合い、多様な価値観に触れたり、折り合いをつけて考えのすり合わせをしたり、友だちと一緒に思いを膨らませたりする等の経験を積み重ねる中で、伝え合う喜びを味わってほしいと願い、援助していきたいと考えた。

以上のような国の動向や子どもの実態から、幼児教育においては友だちと思いを伝え合いながら遊びを深めていく（遊びこむ）プロセスが重要であると捉え、中でも自園の課題である思いの伝え合いに焦点をあてて、本主題を設定した。

III 研究仮説

友だちと関わる場の中で、「きく力」「話す力」における育ちに応じた援助を積み重ね、伝え合う喜びが感じられるような環境の構成や援助の工夫を行えば、互いに思いを伝え合いながら遊ぶ子どもに育つであろう。

IV 研究内容及び方法

1 研究内容

(1) 伝え合う喜びを感じられるような環境の構成や援助を、日々の保育の積み重ねの中で探る。

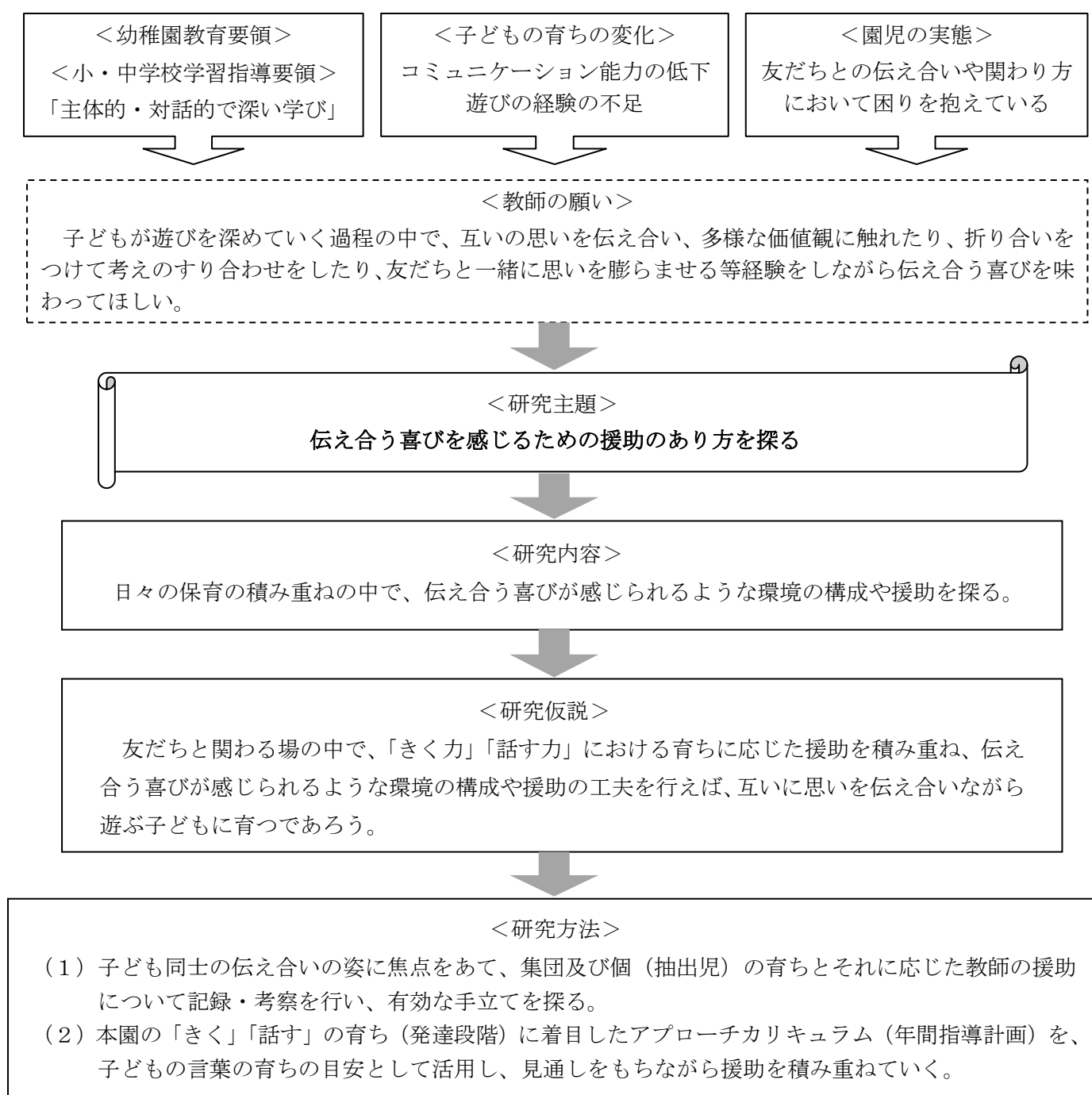
幼稚園教育要領の領域「言葉」の内容の取扱い(1)には、「言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児と関わることにより心を動かされるような体験を

し、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること」とある。このことから、言葉による伝え合いの力を育てていくためには、教師や友だちと関わりを通して自分の思いや考えを表現し、やりとりを繰り返す中で、喜びや楽しさ、面白さ等を感じ、時には葛藤したり悔しがったりできるような遊びや活動を意図的・計画的に行っていくことが大切であると考え。遊びの中で様々な感情を味わい、子どもの「伝え合う喜び」につなげていけるような環境構成や援助を、日々の子どもの姿や保育の評価・改善を通して探っていきたい。

2 研究方法

- (1) 子ども同士が互いの思いの伝え合う姿に焦点をあて、集団及び個（抽出児）の育ちとそれに応じた教師の援助について記録・考察を行い、有効な手立てを探る。
- (2) 本園の「きく」「話す」の育ち（発達段階）に着目したアプローチカリキュラムを、子どもの言葉の育ちの目安として活用し、見通しをもちながら援助を積み重ねていく。

V 研究構想



VI 研究の実際

集団及び個（抽出児）における育ちと、教師が実態に応じて行ってきた援助について、4月から12月までを4つの期に分けて報告する。

- ※ 1…集団について 【事例資料：伝え合う喜びを感じる 集団の育ちの姿と援助】
【研究資料：資料①しっぽ取りゲームについて】
- 2…個（抽出児）について 【事例資料：伝え合う喜びを感じる 個別の育ちの姿と援助】
【研究資料：資料②～④個別の育ちの記録】

VII 研究成果

1 I期（4・5月）

<子どもの姿と援助>

入園当初は、緊張や不安、恥ずかしさ等から、教師と言葉を交わすことが難しい子どもの姿が見られ、まずは、教師に対して親しみをもてるよう、積極的にスキンシップを取ったり笑顔で挨拶したりしながら、何でも言える雰囲気作りを心掛けた。また、子どもが「話したい」「もっと言いたい」と思えるように、動作や簡単な言葉で自分の思いを言えた時に十分に受け止め、思いを表現できたことを認めていった。

教師に進んで話をしてくる子どもについては、友だちにも目を向け、言葉を交わせるように、教師がきっかけ作りをしたり、言葉を補ったりしながら相手に思いが伝わる嬉しさを感じられるよう援助した。

<子どもの育ち>

初めは言葉のやりとりが難しかった子どもも、教師や友だちからの言葉かけに対し、頷いたり首を振ったり、「うん」「いいよ」と短い言葉でやりとりする姿が見られるようになった。そのことを認められると、笑顔になったり、さらに話そうとしたりする等、話す楽しさや聞いてもらえる安心感を味わう様子が見られた。

進んで話してくる子どもは、教師の援助をきっかけに友だちに声をかけたり、友だちの遊びの様子を見たりしていたが、教師がその場を離れたり時間が経ったりすると、友だちのもとを離れ、教師のあとをついて回ろうとすることが多かった。

<成果と課題>

○この時期の子どもは、何でも聞き、理解し受け入れてくれる教師と話したいという思いが強く、友だちには目が向きにくいという実態があった。この時期は、親しみや安心感をもてるような雰囲気作りや、個々の思いを受容する教師の姿勢が大切なのではないだろうか。教師が子どもの思いをしっかり受け入れ、自分の思いが伝わり受け入れられる喜びを十分味わう経験が積み重ねられるようにすることが大切であることがわかった。同時に子どもの気持ちに寄り添いながら友だちと関わるきっかけ作りをしていくことも大切であると感じた。

2 II期（6・7月）

<子どもの姿と援助>

少しずつ友だちに目が向き始め、気の合う友だちと一緒に遊んだり、同じ遊びの場にいる友だちと、自分たちで「貸して」「いいよ」等遊びに必要な言葉のやりとりをしたりする姿が見られるようになってくる。遊びの中でさらに自分の思いを言えるように、教師自身が遊びの仲間となって子どもの思いに共感し、豊かに表現したり、楽しかったことや気づき、困り等何でものびのびと話せるように受け止めたりする等援助していった。また、クラス全体で話を聞いたり話し合ったりする場として、その日の遊びの内容や明日はどんなことをして遊ぶのかを知らせたり、遊びや生活の中で出た困りをみんなで一緒になって考えたりする機会を設けることで、様々な思いに触れたり、友だちの思いを聞くことの大切さに気づいたりでき

るようにした。

同時にこの時期は、友だちとの関わりが増える一方で、自分の思いを押し通そうとしたり、言葉でうまく伝えられなかったりして、友だち同士のいざこざに発展することも多くなってきたので、教師が互いの思いをしっかり聞き、受け止め、相手に伝わるように代弁したり橋渡しをしたりして、互いの気持ちに気づけるよう援助していくとともに、「○ちゃん、わかってくれたみたいだよ」「お話ししてから気持ちが伝わったね」等、子どもが「伝えてよかった」という安心感や満足感がもてるよう配慮していった。

<子どもの育ち>

「貸して」「いいよ」等の必要な言葉のやりとりだけでなく、遊びの中で気づいたことや考えたことを自分から友だちに話したり、返事をしたりするようになった。また、教師が子どもと遊ぶ中で喜んだり悔しがったりすると、感情を共有しながら思いをのびのびと表現する姿が見られるようになった。遊びの内容や困りを知らせる場では、自分の話を聞いてほしいという思いが強く、他の人の話を遮って話そうとすることも多かったが、教師が「○ちゃんのお話が終わったら聞くからね」「△ちゃんの考えはどんな考えかな？」等、一人一人の思いが大切であることを示し、一人一人が話せる時間を保障することで、最後まで話を聞いたり、一緒に考えたりするようになっていった。

いざこざの場面では、教師に思いを言えたことで安心したり、相手に思いが伝わって満足したり相手の思いを知って納得したりして、素直に謝ったり返事をしたりする姿が見られるようになった。

<成果と課題>

○この時期は、教師が一人一人の異なる思いを大切にしようとする姿勢を示す中で、どの人の思いも大切であり、様々な思いの違いがあつていいということが感じられるための援助が必要であることがわかった。

○この時期は、自分の思いを友だちに話したいという気持ちが育ってきているため、「話したい」という思いが強くなり、うまく言葉で伝えられなかったり、相手の話を遮ったり、いざこざになったりすることが多いことがわかった。教師が代弁したり話し方を知らせたりする等、思いを繋いでいく援助も大切な時期であり、言葉を通じて心を通わせる体験を積み重ねていくことが大切であると感じた。

3 III期（9・10月）

<子どもの姿と援助>

遊びや生活の中で自分の思いや考えを言う経験を積み重ねていくにつれ、楽しかったことや困ったことを進んで教師や友だちに話そうとしたり、共感したりする姿が見られるようになってくる。協同的な遊びの中で、1人1人が思いを言う場を保障し、いろいろな考えがあつていいということも知らせ安心して話せるようにしたり、様々な考えの面白さに気付かせたりして、めあてに向かって個々が安心して自分の考えを話したり友だちの考えに興味をもって聞いたりできるような援助を行った。また、自分の思いが伝わるよう動作を加えながら相手に伝えようとする姿を認めたり、その工夫を周りの子どもにも知らせたりしていくことで、さらに話す喜びや伝わる喜びを感じられるようにしていった。

また、この時期の子どもは、めあてに対していい考えが浮かぶと、話したい思いが強いあまり、他の人の話を聞かずに自分の話をし始めることもあった。そこで、友だちの話を聞く中で、一緒に喜びや嬉しさ、悔しさ等の気持ちを共有する時間を保障したり、伝え合うことでみんなの思いが合わさりよりよくなったという満足感を味わわせたりして、友だちの話に興味をもったり最後まで聞いたりできるよう援助していった。いざこざが起きた時は、友だち同士で思いが伝わるよう仲立ちをし、教師が先導するのではなく、子どもと一緒に解決方法を考えていけるように配慮していった。

<子どもの育ち>

グループで話し合う様子を見ていると、初めは思いを意欲的に話す子どもとあまり話さない子ども（聞

いているが黙っている、聞かれると頷いたり「うん」「いいよ」等短い返事をしたりする等)の姿が見られたが、1人1人考えを言う場を教師が設け、個の育ちに応じて認める援助を行ったり、どの子どもの考えも必ず活かされるような機会をつくったりすることで、話し合う楽しさを感じ、全員が自分なりに思いや考えを伝えたり、次の遊びに期待をもったりする姿が見られるようになった。

自分の話を優先していた子どもは、遊びが進んでいくにつれ、自分にはなかった友だちの考えを聞いて興味をもったり、共感したり、質問したりする等、友だちの話を最後まで聞いてから自分の話をする姿が増えてきた。

遊びの中でいざこざが起きた時は、自分の思いが伝わるように話そうとするが、相手に伝わらないこともあるため、教師が言葉を補ったり、話を整理したりすることで、子ども同士で納得しながら解決方法を考えようとしていた。

<成果と課題>

※めあてを共有する遊び…研究資料 資料①参照

○めあてを共有する遊びが増えてくるこの時期は、思いのずれや課題も生じてくる中で、教師と一緒に考える姿勢をもちつつ、子どもたちなりに伝え合いながら解決に向かおうとする姿を支えていくことが大切であることがわかった。また、仲間同士で思いを出し合う面白さや喜び、満足感等を味わえるよう工夫していくことにより、伝え合う喜びにつながり、よりよいものを創り上げようとする意欲にもつながっていくことがわかり、それが遊びが深まっていく基盤にもなることがわかった。

○遊びが深まる中で、伝え合う喜びを味わうためには、めあてや感情が共有されることが大切であることがわかった。めあてや感情が共有されるには、子どもがめあてを見出し、めあてに向かって伝え合い、伝え合ったことを実現しながら繰り返し試行錯誤し、振り返ることでまた新たなめあてを見出すという、遊びの過程を繰り返し経験することが大切であり、教師は子どもの実態からタイミングを捉え、めあてや感情を共有する場において適切に援助していくことの大切さを感じた。

○話し合いの場で思いを表せずにいる子どもも、伝え合う喜びを感じながら遊びを深められるようにしていくためには、その子どもの気持ちに寄り添い、どうしたら話したいと思えるか、なぜ表現しにくいのか等個々の育ちや思いを細やかに捉え支えていくことが大切であった。

個々の育ちや思いを捉え教師が支えることにより、最初は誰か一人の考えだけで遊びが進んでしまっていた姿から、次第に一人一人が思いを出し合い、個々の思いが活かされながら共通のめあての実現に向かっていく姿につながっていくことがわかった。めあてに向かって主体的に伝え合おうとし始めるこの時期は、個々が伝え合う喜びを感じられているかを細やかに捉え、支えていく教師の役割は大きいと感じた。

4 IV期(11・12月)

※ 研究資料 資料①参照

<子どもの姿と援助>

グループで共通の目的をもって遊んだり、遊びの中で困ったことやもっと面白くするためにはどうしたら良いかを話し合ったりする等、友だちと伝え合いながら自分たちで遊びを進めていこうとするが、話が逸れたりうまくまとまらなかったりすることがあった。それぞれの思いや考えを共有したり、イメージとして共通化したりできるように、教師が部分的に話を整理したり(論点の整理、思いの重なりや違いを知らせる等)、視覚を通して理解できるような環境構成を行ったりして、同じ目的に向かって自分たちで遊びこんでいけるように援助した。いざこざの場面でも、教師が介入しなくても自分たちで話して解決することが増えてきたので、教師は見守るようにし、解決できたことを認めたり他の子どもにも知らせたりして、自分たちで解決できた喜びを味わえるようにしていった。

一方、自分たちで話を進めていこうとはするものの、この時期の子どもは、自分たちだけでは途中で話の趣旨がずれてくることもあり、援助のタイミングが遅れると、話し合いが滞り、遊びが停滞することも

あった。

<子どもの育ち>

自分たちの考えた遊びが実現できるように話し合う中でうまく伝わらないときは、自分のイメージに合ったものを実際に持ち出して話したり、絵に描いて伝えたりする等、考えを共通理解できるように工夫し、周りの子どももそれに答える姿が見られるようになった。同じ考えをもって話していても言葉の違いから別の考えと捉えてしまうことが多かったが、教師が話を整理し、同じ思いであることを伝え、安心して話を進める姿も見られた。また、イメージが共通化され、実現していくと、友だちと一緒に喜びや面白さを感じ、さらに伝え合いながら遊びを深めていくようになっていった。さらに、遊びの深まりと共に次第に自分たちで「その考えいいね」「ほんと」「この考えとこの考えを合わせよう」「いいね」等自分たちで友だちの思いを認めたり互いの考えが合わさってよりよくなったことを喜んだりする姿も見られるようになっていった。

いざこざも、自分たちで話して解決できたことを教師に報告しに来たり、どうしても解決できないときだけ教師に相談したりする等、できるだけ自分たちだけで解決していこうとする気持ちがうかがえた。

<成果と課題>

○この時期になると、子ども同士でめあてに向かって思いを伝え合おうとする姿が見られ始めるが、出した思いを実現し満足感を得た子どもたちは、今度はさらに自分たちで伝え合おうとする姿につながっていた。また、遊びが深まっていく過程では、次第に相手の考えを認めながら伝え合う姿へと変容していった。「話し合っよかった」という実感が伝え合う喜びにつながり、伝え合う喜びが「また伝え合おう」という意欲につながったのではないだろうか。

一方、伝え合いを重ねる中で、子ども同士では話の趣旨がずれてきたり、めあてが曖昧になったりすることもあった。この時期は、子どもの主体性を大切にしながらも、教師が子どもの姿を見取り、場面を捉え、タイミングを見ながら話の内容を確認したり、めあてを再確認したりする援助も必要であることがわかった。

○話し合いの中での子どもの姿を見ていくと、「なるほど、いいね」「〇ちゃんと考え一緒だね」「〇くんの考えはこうやろ、〇ちゃんの考えはこうやろ」等相手の思いに共感したり互いの思いの重なり気付いたり思いの違いを整理したり等の姿が見られるようになった。Ⅰ期～Ⅳ期の教師の援助や姿勢が、この時期の子どもの「きく」「話す」活動における姿と重なっていることがわかった。年間を通した「きく」「話す」における教師のモデルとしての役割は大きいと感じている。

○「個や集団」の育ちをしっかりと捉えながら、Ⅴ期（1～3月）へ向けて少しずつ教師の出番を少なくし、友だちと伝え合いながら遊びや生活を自分たち自身で進めていく楽しさや充実感を味わえるようにしていくことが大切であることがわかった。さらに、子どもの育ちや変容に応じて、今は伝え合う喜びをどこで感じているかということを実態から考察しながら次の援助につなげていくことが大切である。

5 Ⅰ～Ⅳ期を通して

○個の育ちと集団の育ちは相互に作用しながら育まれていくものであると感じた。教師が「きく」「話す」活動における個と集団の実態をしっかりと把握し、それぞれにねらいをもって援助し積み重ねていくことが、伝え合う喜びを味わいながら遊びを深めていくことにつながっていくのではないだろうか。

今後も「きく」「話す」活動における年間指導計画を拠り所としながら見通しをもち、同時に個々の育ちを細やかに捉えながら丁寧に援助を積み重ねていきたい。

○Ⅲ期やⅣ期の事例を通して、遊びの内容が深まっていくにつれ、めあてやそれを達成するための工夫の変化、グループごとの仲間意識の変容、めあての実現に対する個々の思い入れ、伝え合いにおけるグループや個々の考えの深まり、協力の仕方の変容等が見られ、互いの思いを伝え合いながら遊びが深まっ

ていく過程の中で、コミュニケーション力、思考力、協同性等、様々なものが育ち、さらに高まってくることがわかった。子どもの様々な育ちに、遊びの充実は不可欠であると感じた。

今回の研究では、遊びこむ過程の中で伝え合う喜びを感じる援助について探ってきたが、主体的に遊びに取り組み、互いの思いを伝え合い、遊びを深めていく過程の中で、遊びの深まりと伝え合う喜びも（コミュニケーション力における育ち）関連があると感じている。今後も理解を深めていきたい。

Ⅸ 今後について

今回、私たちが行ってきた研究は子どもたちが自分の考えを互いに伝え合う姿が見られるための援助の工夫を明らかにするというものであった。その結果、教師が取るべき援助は個々や集団の発達に即したものであるということがわかってきた。

ただ、今の段階でまだ明らかにされていない事がある。それは、子どもが「遊びこむ」姿の見取りである。表面上遊ぶ姿は日常的に見られる。しかし、子どもがどのような心情でどのような姿を見せている時に「遊びこんでいる」と判断できるのであろうか。また、どのような教師の援助の工夫が必要なのであろうか。そのことについては十分明らかにしたとは言えない。

目の前の子どもたちに遊びを通じて十分な学びを育ませたいと願っている。本研究を終えようとしている今、次に取り組むべき課題が明らかになってきたと実感している。

Ⅹ 参考文献

○文部科学省ホームページ

- ・「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）
- ・「幼稚園教育要領」（平成29年3月）
- ・「改訂のポイント」（平成29年3月）
- ・「新しい学習指導要領の考え方」（平成29年3月）